

東京ドームの節電対策による観戦への影響
The Influence of Watching Games by Power Consumption
—The Case of Tokyo Dome—

1K08B173-0

平岡憲

指導教員 主査 原田宗彦 先生

副査 松岡宏高 先生

【緒言】

2011年3月11日の東日本大震災以降、東京電力福島第一原子力発電所の事故による電力使用状況の逼迫により、日本国民の節電意識が急激に高まった。東京ドームでは震災以前、約40,000kWhの電力を使用しており、これを23,000～24,000kWh程度まで減らすと発表し、最大限の節電努力を行った。

【目的】

読売巨人軍と東京ドームが行った節電対策について、観戦者・施設スタッフ側からのインタビューにより問題点を探り、考察することによって、今後の東京ドームで行われる節電対策やエコな興行を行う際のマーケティングプラン策定において重要な情報を提供することが目的である。

【調査方法】

本研究では、観戦者9名と施設スタッフ6名に半構造化インタビューを行った。観戦者は10月14日(金)・15日(土)の試合後21時半から22時半まで、16日(日)の試合後18時から19時まで、同日観戦に来ていた観戦者を東京ドーム周辺でインタビューを依頼し調査を行った。施設スタッフは同月16日(日)17時から17時50分までに6名の施設スタッフの方々に対してグループインタビューを行った。

【結論】

メリット

まず、「照明の光が当たり過ぎないために、ボールが見えやすいということ」である。この点は数名のインタビューイーが指摘したことであり、反対に「見えにくくなった。」というインタビューイーが一人もいなかったことを考えると、少なからず観戦に良い影響が出ていたのだと考えられる。次に、「新しいサービスを始めるきっかけになった」ということである。例えば、無料配布のうちわを福島で製造し、うちわの種類を増やしたり、ビールフェアを行ったりしたことである。この点に関して、観戦者の満足度が高いことはインタビュー調査からも明らか

になっている。運営側としても、節電対策が新しいサービスの導入のきっかけになり、ビールの売り上げの向上や観戦者の満足度の向上に繋がっていると考えられる。

デメリット

まず、「暑さ」の問題である。全てのインタビューイーが暑さを指摘しているように、今回の節電対策による空調の使用制限は観戦にかなりの悪影響を与えていることが分かる。次に、「試合時間の制限」である。今年のペナントレースでは、3時間半以降は新しい回には入らず、12回で試合終了という試合時間の制限がなされていた。そのために、僅差のゲームで引き分けに終わってしまうことが多々あり、野球のルールが変わってしまった点に関して不満を持つ観戦者が多かった。運営側のデメリットとしては、無料配布のうちわや自家発電機の導入などによる費用の増大が挙げられる。今回はこの点について球団関係者からのインタビューが出来なかったために明らかにすることが出来なかったのだが、施設スタッフのインタビューからその点が触れられていた。

【考察】

今後、節電対策やエコな興行を行う際の改善案として、「空調制限の緩和」と「試合時間制限の撤廃」という2点は今後実施していかなければならないと思う。さらにそれに付随して「サービスの質の向上」も観戦への満足度を高める施策として取り入れていかなければならない。例えば、無料ドリンクの配布やドリンクの割引チケットの配布、ビールフェアの継続などである。熱中症になった観戦者もいることから、熱中症対策も兼ねたサービスの向上をしていかなければならない。また、照明に関しては上記のメリットにもあるように、ボールが見えやすくなっているという声が上がっていることから、選手に支障をきたさない程度まで照明の減灯数を最大限増やしてもいいのではないかと思う。また、このことは節電対策以外の際でも実施すべきことが可能であり、通常の興行の際も照明の減灯をしていくべきだと考える